慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『初学記』に見られる「田真説話」の変容：二十四孝の研究
Sub Title	
Author	張, 滌非(Chō, Dekihi)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2022
Jtitle	三田國文 No.67 (2022. 12) ,p.60- 74
JaLC DOI	10.14991/002.20221200-0060
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20221200-0060

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『初学記』に見られる「田真説話」の変容

――二十四孝の研究――

張　滌非

一、はじめに

「田真説話」とは、三人兄弟の間における財産分与の話が要点となる孝行話であり、元時代の郭居敬が撰述した『二十四孝』という教訓書に収録されてから、広く世の中に知られるようになった。日本では『将門記』、『注好選』、『今昔物語集』、井原西鶴の『本朝二十不孝』などに影響を与えていると見られる。ただし、大舜、孟宗、王祥などの有名な孝子話と比べ、「田真説話」は親孝行の要素が薄く感じられるのが原因で、孝子説話の研究史において、あまり主なテーマとして取り上げられていなかった。[1]

柳瀬喜代志氏の「「三荊」故事源流考」により、周景式撰『孝子伝』にある「荊樹連陰説話」と、南朝・梁の呉均撰『続斉諧記』にある「田真説話」は、ともに西晋・陸機の「豫章行」の「三荊」詩句と深く関わりがあることが分かった。拙稿「「三荊」の出自について―二十四孝の田真説話の研究―」（『三田國文』第六六号　二〇二一年一二月）の考察により、「三荊」の典拠は「古上留田行」、「荊樹連陰説話」、「田真説話」などではなく、周の太伯兄弟が離別を悲しむ「哀慕歌」であるという可能性を示した。また、拙稿「「田真説話」の生成について―二十四孝の研究―」（『藝文研究』第一二二号　二〇二二年六月）において、「田真説話」は呉均によって、太伯兄弟の話、田儋兄弟の話、及び『異苑』にある「死桐復青」の話に基づいて作られたものであり、梁武帝に対する諷刺作であるという新たな説を提示した。

先行研究[2]によると、『二十四孝』が成立する前に、「田真説話」はすでに唐・宋時代の類書に多く収録されているのである。今回は主に唐代の類書『初学記』に見られる「田真説話」の変容について考察してみたい。また、「荊樹連陰説話」は「田真説話」との関連性から、その唐代の類書にあるテキストも今回の考察の対象とした。

二、唐代の類書における「荊樹連陰説話」

『芸文類聚』とは初唐の勅撰類書である。武徳七年（六二四年）、唐の高祖帝李淵に命じられて、欧陽詢らが二、三年で完成したものであり、現存の類書中では『北堂書鈔』に次いで最

古だと言われた。宋の紹興十年（一一四〇年）版、明の嘉靖六年（一五二七年）版、万暦一五年（一五八七年）版、上海中華書局版複製十六冊（一九五九年）などがある。『初学記』とは唐代の勅撰類書である。玄宗帝に命じられて、徐堅らが開元十五年（七二七年）に撰したものである。記事の正確さにおいては『芸文類聚』に優る。明の嘉靖十年（一五三一年）刊の安国重校本、古香斎本、北京中華書局の活字本三冊（一九六二年刊）などがある。『芸文類聚』と『初学記』は、ともに日本国見在書目録に記され、寛平年間までに日本に将来されていたことが分かる。漢詩文等の漢文制作や奈良・平安時代の説話文学と関わりがあるだけではなく、和名類聚抄、色葉字類抄などの古辞書や、幼学指南抄などの類書にも幅広く影響を与えている。[3] 本稿はまず、①『芸文類聚』[4]「巻八九・木部下・荊」と②『初学記』[5]「巻十七・友悌第五「棣華　荊葉」の条」に載る「荊樹連陰説話」の本文を取り上げたい。比較するために、下記の表一を作成した。本文の異なる部分は傍線を付して示す。

表一

① 芸文類聚	② 初学記
周景式孝子伝曰	周景式孝子伝曰
古有兄弟、忽欲分異	古有兄弟、意欲分異
出門見三荊同株、接葉連陰	出見三荊同根、接葉連陰
歎曰、木猶欣聚	歎曰、木猶欣聚
況我而殊哉、還為雍和	況我而殊異哉、還為雍和

表一から分かるように、『芸文類聚』に載る本文と比べると、『初学記』にある「荊樹連陰説話」の本文で変更したところは四ヶ所である。変更した部分の中で、文字の変更は、「忽欲」から「意欲」に、「同株」から「同根」に、二ヶ所が変わり、字の削除は、「出門見」から「出見」にと一ヶ所が変っている。字の増えたところでは、「殊哉」から「殊異哉」への一ヶ所である。

まず、字の変更の意義を考察してみたい。

「忽欲」とは「突然、急に思う」という意味合いがあり、「意欲」とは、「と思う」という意味である。「忽欲」から「意欲」に変更すると、文の意味は、「兄弟は理由無しに、急に分けようと思う」から、「兄弟は分けようと思う」に変わり、話の突飛さが消え、あらすじの展開が自然になったと思われる。

次に、「同株」と「同根」の違いを考えてみたい。

「三荊同株」は、陸機の「豫章行」の「三荊歓同株」詩句を踏まえた句である。梁の鍾嶸（四六九年？～五一八年？）は、文学評論書『詩品』[6]の中で、陸機の詩作が陳思王曹植に源流を発すると説いている。陸機の詩句にある「同株」も、曹植の「七歩詩」[7]の「本自同根生」という詩句の影響を受け、自分の詩作に合せて、適宜に変形したものだと考えられる。「同根」は、曹植の詩[8]によって、後に兄弟を指し示す言葉として定着していく。「同株」から「同根」に変化させたのは、「兄弟」の意味を更に強調するためと考えられる。

次に、字の増加と削除の意義を検討したい。

言葉の意味から見れば、「出門見」と「出見」、「殊哉」と

「殊異哉」はニュアンスの違いはあるが、文の全体的な意味には大きな影響を与えるには至っていない。「出レ門見」は「出見」と比べると、「門から」という経過する場所を示す程度であり、「殊」と「異」はほぼ同じ意味であり、重ねて使っているのは意味の強調にしか過ぎない。ただし、字が増加と削除をされた後は、①と比べ、②の文節の字数が変わる。

「周景式孝子伝曰」という所出を明示するための部分を除外し、本文の字数を比べると、①と②の文節の字数は以下となる。

①四、四、七、四、二、四、五、四

②四、四、六、四、二、四、六、四

①と②を比べれば、②のほうが更に四六調の韻文に相応しい体裁として整えられていることは明白である。ここで注意すべき点が一つある。『初学記』は、類書として辞書の性格を持ちながら、典拠を忠実に記録するのではなく、適宜に手を加えて文章を修正している点である。

『大唐新語』[9]により、『初学記』の編集事情を窺うことができ、それには、皇子たちが作文をするための模範となる文章が求められ、昔から伝わってきた説話の本文に適宜に手を加え、より合理的に修正したであろうということも考えられる。柳瀬喜代志氏はそれについて、「これは初学の皇子たちが作文をする為に、最も便宜な手引書が要求され、それに答える形で、典故となる話、典故を略頌する対句、文学的表現の模範とすべき詩文を兼備する類書が編集されたという事情を伝えている」と述べている[10]。ここには、『初学記』の編者たちが、読者である皇子たちを想定しながら編集した意図が見て取れる。

三、『初学記』における「田真説話」

次に、③『続斉諧記』[11]と④『初学記』「巻第十八・離別第七・「四鳥　三荊」の条」における「田真説話」の本文を比較するために下記の表二を作成した。

③の最後の「陸機詩云三荊歓レ同レ株」と、④の最初の「呉均続斉諧記曰」の部分は、附加説明の文であり、その比較は対象外とした。

また、『続斉諧記』の「田真説話」と比べ、『初学記』の「田真説話」の同等あるいは近い意味を表わす文を一単位として、主に新しく増加された部分と、削除された部分について、傍線を付して考察を行う。

表二

③　続斉諧記	④　初学記
京兆田真、兄弟三人	京兆人田真、兄弟三人
共議分財、生貲皆平均	共分財各居
惟堂前一株紫荊樹	堂前有一株紫荊
	華甚茂
共議欲破三片、明日就截之	共議破為三、待明截之
其樹即枯死、状如火然	忽一夕、樹即枯死
真往見之、大驚、謂諸弟曰	真見之、驚謂諸弟曰
樹本同株、聞将分斫、所以顛悴	本同株、当分析便憔悴
	況人兄弟孔懐、而可離異

是人不如木也	是人不如樹木也
因悲不自勝、不復解樹。樹応声栄茂	
兄弟相感、合財宝	兄弟相感更合
遂為孝門、真仕至大中大夫	

『初学記』の「田真説話」で削られている部分は、「生貲皆平均」と、「状如二火然一」のような写実的な描写、木が不思議に蘇ったという「樹応レ声栄茂」の部分、そして最後の「合二財宝一」、「遂為二孝門一、眞仕至二大中大夫一」という後日譚の部分である。このような修正を受けて、『初学記』の「田真説話」には、六朝の志怪小説が備える怪異さと孝行の要素が薄れていくことになった。

次に、『初学記』の本文に新しい意味を付与した添加部分についての考察である。

④の傍線部で示したように、「各居」、「華甚茂」、「況人兄弟孔懐、而可二離異一」という言葉は、③の『続斉諧記』には記されていない内容である。原文にない内容を添加することは、必ず説話に新しい要素を入れようという編者の意図が働いていると思われる。そこで、増加した部分の内容を主な対象として考察した。

まず、「各居」と、「(況人兄弟孔懐)而可二離異一」という言葉で示したように、③『続斉諧記』の話には記されていないが、④『初学記』では、兄弟が別れて別々に住もうとする。すなわち『初学記』には、兄弟が離別しようという要素が入っているのである。『続斉諧記』の話は、兄弟が財産を分けるという内容のみの言及である。

また、兄弟の離別に対する『初学記』の編者の態度は、「(況人兄弟孔懐)而可二離異一」、「別れてもいいのか、いや、別れてはいけない」という批判的な態度となっている。話の最後の部分も、③『続斉諧記』のような、兄弟が財宝を合わせることではなく、兄弟が仲直りし、別居することを止めたという話になる。

④の『初学記』において分類された部立ては、「離別・「四鳥三荊」」の条であり、陸機の「豫章行」を意識して創られた類目である。[12] ここで想起されることは、周の太伯兄弟の離別の話である。

次に、③『続斉諧記』には「華甚茂」という言葉もない。『大漢和辞典』によれば、「華」とは「花」のことであり、「華」は、特に木に咲いた花を指すということが分かる。[13]「華甚茂」とは、「花が盛んに咲いている」様子を指し示している。木(紫荊樹)に花が咲いているということは、呉均の『続斉諧記』と、『五臣集注文選』[14]の劉良注の「田真説話」には存在しない内容である(その他に、『磐溪廿四孝賛』[15]に載る「紫荊再栄説話」は、呉均撰『続斉諧記』の「田真説話」と同文に近いので、「華甚茂」の一節もない)。

しかし、これまでに調べた範囲内では、「花」が出てくる例として、『琱玉集』[16]の「田真説話」には「華葉美茂」、宋代の『太平御覧』[17]巻四二一の「田真説話」には「花葉美茂」、同巻四八九の「田真説話」には「花葉茂異」、元代の胡炳文撰『純正蒙求』[18]の「田真荊花説話」には「堂前荊花甚茂」、同じ元の

郭居敬撰と言われる『新刊全相二十四孝詩選』[19]の「田真説話」には「花葉茂盛」があり、日本の『注好選』[20]の「田祖は直を返す第九七」には、「四季に花を開く荊三茎在りて、一花は白、一花は赤、一花は紫なり」とある。『今昔物語集』巻十[21]の「震旦三人兄弟、売家見荊枯、返直返住語第二〇」には、「四時ニ花栄テ面白キ事無限シ」、嵯峨本と渋川版『二十四孝』の「田真説話」には、「花もさきみたれたる」、徳田武氏所蔵『加言二十四孝』[22]（文化四年〈一八〇七年〉）の「田真説話」に「花さき実なり」とある。須原屋版『二十四孝』の「田真説話」には「花さき實のり」、及び他の元和寛永、正保、明暦、寛文、天和、貞享、文政、天保年間に出版されたとする刊本及び写本系の書物のすべてに、「花が咲く」という要素が欠けることなく存在している。[23]そこで、その「花」の由来及び意義が重要であると推測し、考察を重ねてみた。

四、「花」の意味

「花」を調べるための一つの手掛かりとなるのは、④『初学記』の「田真説話」の本文に新しく添加されているもう一ヶ所の内容「況人兄弟孔懐、而可二離異一」の文中にある「兄弟孔懐」という言葉である。この言葉は『初学記』の「荊樹連陰説話」と同じ類目に記される「棣華」の条に見られる。[24]前文の考察で分かるように、「華」は「花」に通じ、「棣華」とは、「棠棣の花」を指すのである。[25]この条の初出の毛詩とは、『詩経』（周詩）の別名である。『詩経』でその全文を引用したい。

『詩経』「小雅・常棣」

常棣之華　鄂不韡韡
凡今之人　莫如兄弟
死喪之威　兄弟孔懐
原隰裒矣　兄弟求矣
脊令在原　兄弟急難
毎有良朋　況也永歎
兄弟鬩于牆　外禦其務
毎有良朋　烝也無戎
喪乱既平　既安且寧
雖有兄弟　不如友生
儐爾籩豆　飲酒之飫
兄弟既具　和楽且孺

（常棣の華　鄂ぞ韡韡たらざらんや）
（凡そ今の人　兄弟に如くは莫し）
（死喪の威れにも　兄弟孔だ懐ふ）
（原隰　裒すにも　兄弟　求む）
（脊令　原に在り　兄弟　難に急く）
（毎に良朋有り　況さ永歎す）
（兄弟　牆に鬩ひ　外　其の務りを禦む）
（毎に良朋有り　烝ち戎くる無からんや）
（喪乱既に平らぎ　既に安んじ且つ寧まれり）
（雖に兄弟有り　友生に如かざらんや）
（爾の籩豆を儐ね　飲酒して之れ飫かん）
（兄弟　既に具ひ　和楽し且つ孺しまん）

妻子好合　如鼓瑟琴
（妻子好く合し　瑟琴を鼓くが如し）
兄弟既翕　和楽且湛
（兄弟　既に翕ひ　和楽し且つ湛しまん）
宜爾室家　楽爾妻帑
（爾の室家に宜しく　爾の妻帑を楽しましめよ）
是究是図　亶其然乎
（是に究め是に図り　亶に其れ然しからん）

余説　《毛序》常棣は、兄弟を燕するなり。（略）《集伝》此れ兄弟を燕するの楽歌。詩意については、目加田誠は「常棣の花の咲き溢れるをもって、兄弟が心を一にして栄えてゆくさまをいい起こす（略）」と論じ（略）

目加田誠氏の説明で分かるように、常棣の花は、兄弟和睦の象徴である。『詩経』は中国で最も古い詩集であり、「常棣」も、またその中で「兄弟和睦」を歌った歌として有名である。

『初学記』の編者は、「田真説話」に「華甚茂」と「兄弟孔懐」を添加することによって、「兄弟和睦」という要素を入れようとした痕跡が窺える。

『初学記』の「巻十七友悌」の類目に、「棣華」は、「荊樹連陰説話」を表わす「荊葉」の対句として並べられ、そして「巻十八離別」の類目に進むと、「田真説話」に、「兄弟和睦」要素が添加されるという変化が起こる。しかも『初学記』は適宜に本文を修正することもあり、『初学記』の編者は他の資料を参照したのではなく、『初学記』を編集しつつ、その改作を行った可能性があると考えられる。改作する理由としては、『初学記』の読者である皇子たちを意識しているのではないかと思われる。

周景式撰『孝子伝』の「荊樹連陰説話」と呉均撰『続斉諧記』の「田真説話」は、陸機の「豫章行」と深く関わっていることはすでに述べた。また、拙稿「「三荊」の出自について―二十四孝の田真説話の研究―」での考察のように、陸機の「豫章行」の「三荊」が基づいた典拠は、周の太伯兄弟の話だと考えられる。

その話の中で、太伯と仲雍は父の胸中を推し測って自ら家督相続の権利を弟の季歴に譲った。この二人の行動は親孝行の面から見れば徳高く、極めて尊い行為ではあるが、長幼に序ありという儒教精神を重んじ、長子が家督相続をするという伝統のある中国で、特に国の盛衰にも関わる皇子たちの教育において、これは扱い難い素材であるとしか言えない。

一方、太伯兄弟の子孫は、中国歴史上、八百年近い周王朝を開いた人物であり、太伯兄弟も徳の高い人物として、司馬遷の『史記』「世家」の最初に記載されている。その史実は容易に抹殺できない。太伯兄弟は聖人と言われ、その行動に対する批判は不可能に近い。また、陸機の「豫章行」も、詩集から消去することは不可能である。陸機は西晋の文壇を代表する一人であり、駢文対句を重んじる詩風を開いた人物とも言われている。彼に対する評価は、『文心彫龍』[26]という文学評論書を初め、数多の記録に確実に存在している。その「豫章行」も中国の南朝・梁の太子簫統（五〇一年～五三一年）が編纂した『文選』に採録され、「三荊」という言葉は、梁朝の幕臣たち及び

後の時代の詩人たちの詩文にも引用され、その一連の資料をすべて抹消することも不可能であるといえる。

仮説ではあるが、李善（六三〇年？～六九〇年）が、唐の高宗帝李治に進呈した文選注に書かれている「古上留田行」、唐の開元年間（七一八年）に、朝廷に進呈された『五臣集注文選』のなかで、劉良注によって書かれた「田真説話」、そして『初学記』（唐・開元十五年～十六年〈七二七年～七二八年〉）の、「田真説話」の改作などの事情を見れば、陸機の「三荊」典拠に対しての判断を間違ったというよりは、六三〇年以降に唐の朝廷に仕える文人集団が、意図的に「三荊」の典拠を入れ替え、補完作業を行ったのではないかと考えられる。

初唐の楊炯（六五〇年～六九三年頃）は、「従弟去盈墓志銘」の中で、「三荊」を使って、従弟の死を悼んでいる。「三荊揺落、五都悲涼。痛二門戸之無レ主一、悼二人琴之両亡一。」（『楊盈川集』[27]「巻九・墓志」）。ここでの「三荊」は、兄弟の永久の離別を悲しむ意として使われた。この墓志銘を作った年代は、その記述中の「以二上元三年〈六七六年〉五月二十二日一歿二于京師勝業里一（略）至二儀鳳四年〈六七九年〉十二月二日一歸葬二於華陰之某原一」により、六七六年五月から六七九年十二月までの間と考えられる。そして注意すべき点は、この墓志銘は親族を哀悼する文であり、朝廷に進呈した正式な文書ではないことである。

もう一首の全文には、「三荊」という言葉はないが、興味を引く詩作として、唐の詩人李白（七〇一年～七六二年）の「上留田行」[28]がある。

『全唐詩』「巻一六二・李白・上留田行」

行至上留田　（行きて上留田に至れば）
孤墳何崢嶸　（孤墳何ぞ崢嶸たる）
積此萬古恨　（此の萬古の恨みを積み）
春草不復生　（春草また生ぜず）
悲風四辺來　（悲風四辺より來たり）
腸断白楊声　（腸断白楊の声）
借問誰家地　（借問す誰が家の地ぞ）
埋没嵩里塋　（埋没す嵩里の塋）[29]
古老向余言言是上留田　（古老余に向かつて言ふ言これ上留田と）
蓬科馬鬣今已平　（蓬科馬鬣今すでに平らかなり）
昔之弟死兄不葬[30]　（昔これ弟死して兄葬らず）
他人於此挙銘旌[31]　（他人此に於いて銘旌を挙ぐ）
一鳥死　百鳥鳴　（一鳥死して　百鳥鳴く）
一獣走　百獣驚　（一獣走りて　百獣驚く）
桓山之禽別離苦[32]　（桓山の禽別離の苦しみ）
欲去廻翔不能征　（去らんと欲して廻翔征くこと能はず）
田氏倉卒骨肉分　（田氏倉卒骨肉分かれ）
青天白日摧紫荊[33]　（青天白日紫荊を摧く）
交柯之木本同形　（交柯の木もと同形）
東枝顛顛西枝栄　（東枝顛顛西枝栄ゆ）
無心之物尚如此　（無心の物尚ほ此くの如く）
参商胡乃尋天兵　（参商胡ぞ乃ち天兵を尋ねん）
孤竹延陵　（孤竹延陵）

讓国揚名　（国を讓つて名を揚ぐ）
高風緬邈　（高風緬邈）
頽波激清　（頽波清に激す）
尺布之謡　（尺布の謡）
塞耳不能聴　（耳を塞ぎて聴くこと能はず）

詩人李白が、これを詩作した意図については、すでに数多くの先行研究[34]によって議論されている。この詩作の時代背景についての憶測は控えたい。ただし、この詩作の内容については、これまでに調べた「三荊」典拠と関係のある資料とは、何らかの形で関わりがある。具体的な内容は、詩文の傍線部と注釈の資料を参照されたい。

また、この詩作の最後に取り上げられた四つの典拠（参商・孤竹・延陵・尺布之謡）は、国を讓るかどうかの「讓国」に関わりがあり、皇族の兄弟の間の話であることも、考えさせられるところである。

「参商」（『春秋左氏伝』[35]「三・昭公元年」に所出）は、中国上古時代の五帝の一人と言われる高辛氏の息子の兄弟不和についての話である。「孤竹」（『史記』[36]「巻六一・伯夷列伝第一」に所出）は、孤竹国の伯夷・叔斉兄弟についての話であり、「延陵」（『史記』[37]「巻三一・呉太伯世家第一」に所出）は、春秋時代の呉王の息子、季札兄弟についての話で、いずれも兄弟がお互いに国を讓る話である。「尺布之謡」（『史記』[38]「巻一一八・淮南衡山列伝第五八」に所出）は、淮南王劉安が謀反を起こし、漢武帝に誅される話である。特に伯夷と季札については、何らかの形で太伯兄弟の話に関わっているように思われる。[39]

李白の「上留田行」の最後の一句「塞レ耳不レ能レ聴」は、ただ「尺布之謡」という歌を聞き忍ぶことを指すのか、あるいは他の意味を暗示しているのか。これは李白が長安に出仕しようと行った折、その周辺にいる宮廷官僚との関係、及びこの「上留田行」の創作年代が明らかでない以上、判断できない。

唐代における「三荊」の典拠についての改作事情を見ると、三つの段階に分けられる。一、李善（六三〇年頃～六九〇年）の『文選注』に書いてある「古上留田行」。二、劉良の『五臣集注文選』（開元年間〈七一八年〉）に書かれた「田真説話」。三、『初学記』（開元十五年～十六年〈七二七年～七二八年〉）に載せられた「田真説話」である。

一は、「三荊」典拠を太伯兄弟の話から民間の兄弟不和の話に変える。二は、兄弟不和の話から兄弟和睦の要を説く「田真説話」に変える。三は、更に「田真説話」に、兄弟和睦を象徴する花の要素を添加した。特に一と二・三は全く内容の相反する話となる。改作を行った文人たちの前後の態度が変わった理由は、どこにあるのか、更に考察を深めて推測してみたい。

「田真説話」の資料を調べると、元・胡炳文（一二五〇年～一三三三年）撰『純正蒙求』には、「曹植豆萁・田眞荊花」の条に続いて、「阿豺竹箭・玄宗棣華」の条が並べられている。その「玄宗棣華」[40]の話からは、二つの点が読み取れる。

一つは、宮中に「花萼相輝」という楼を設置することを命ずるのは玄宗帝である。その楼名に含まれる意味は、「棣萼宴」「兄弟」であり、兄弟和睦を唱える『詩経』の「常棣」に由来する。二つ目は、このことは後に、玄宗帝の性格が「敦睦」であ

り、兄弟友愛の情を賞賛する名目となった。

更に、「花萼相輝之楼」について調べると、『唐書』[41]と『旧唐書』[42]の中で、次のような内容が確認できた。

睿宗帝が初めて皇位についた時、嫡長子の李憲を皇太子に立てた。後に政変が起こり、女帝武則天に皇位を譲り、李憲も皇太子の位から廃された。睿宗帝の第三子李隆基は、後の皇位を奪還する行動の中で功を立てた。改めて皇位に戻った睿宗帝は、皇太子の人選で迷った。李憲は嫡長子であり、かつて一度は皇太子になったことがある。しかし、三子の李隆基は、皇位奪還の行動の中で功を立てている。その時、長子の李憲は皇太子の位を自ら辞退した。睿宗帝は喜び、李憲に物質面からいろいろ援助した。李隆基（後の玄宗帝）は、皇太子になった後、太平公主が政権を廻り、彼と争いが起った。李隆基は政権により、李憲を味方にする必要が生じる。それで、兄弟の情を忘れていないことを証明するために、大きな布団と長い枕をわざわざ作り、兄弟達と一緒に使った。その行為は睿宗帝を喜ばせた。李隆基は皇帝になってから、兄弟の和睦を表わすために、宮中に「花萼相輝之楼」を設立することを命じた。後に、弟の李業の病気の平癒を祝うために、玄宗帝は「棠棣花重満、鴒原鳥再飛」という詩を賦し、兄弟愛を表わした。「棠棣の花」と「鶺鴒」は、すべて『詩経』「常棣」に由来する兄弟和睦のたとえである。臣下はそれを以て、玄宗帝の友悌愛を大々的に誉め称え喜ばせた。

李憲は政治に干渉しないという慎み深い態度を最後まで貫いた。それに報え、玄宗帝は李憲に兄弟の情の深さを訴え、『唐書』にも『旧唐書』にも、玄宗帝が李憲に対しての物質面からの援助を長々と書いている。李憲が没した後、玄宗帝は「高世之行」と言える行為は、皇太子位を辞退したことである。玄宗帝が彼に送った謚「讓皇帝」からも分かるが、玄宗帝は兄弟の絆を大切にするというよりも、李憲が皇位を譲ったことについて感謝していると言える。

以上の考察から分かることは、「花」は、玄宗帝の兄弟愛の象徴となり、その基点は、李憲が皇位を譲ったことにある。

李隆基を推戴する臣下達は、彼のために皇太子位を争い、睿宗帝に進言したとき、「聖庶抗レ嫡」という言葉を使った。睿宗帝は李隆基を皇太子にする詔の中で「爰符二立レ季之典一」（季歴を王として立つ典拠に相応しい意）という言葉を使った。また、李憲が病没した後、玄宗帝は彼を哀悼する文章の中で「能以レ位讓、爲二呉太伯一」という例えを使った。すなわち、玄宗帝と李憲の兄弟関係を周の季歴と太伯兄弟に喩えることは、唐の皇室及びその臣下の間で、すでに暗黙の了解となったのである。

この考え方に基づき、改めて『初学記』の「田真説話」の改作を見れば、編者は陸機の「三荊」についての本当の典拠（太伯兄弟の話）を意識しているからこそ、その改作を行ったと考えられる。そうでなければ、民間の兄弟についての話に、当時の天子を誉め称える言葉を載せることは、非礼なことであるとも言える。

「三荊」の典拠は、唐の文人たちによって意識的に改作され

たとする仮説のもと、唐の政治事情と合せ、改めて唐代に入ってからの三つの改作段階を分析すると、以下のように考えられる。

李善の『文選注』は、高宗帝李治に進呈した書物である。高宗帝の父、太宗帝李世民は皇太子である兄を殺害し、父に迫って皇位を譲らせた（玄武門の変）。そのことを憚って、李善は「三荊」の典拠を「古上留田行」と言い出し、民間の兄弟の話に変えた。その話の内容も、兄が弟を虐める話となった。

玄宗帝治世の時代となり、玄宗帝の皇位は兄の李憲から譲られたものであり、玄宗帝も兄に対して感謝の意を明確に示した。従って、開元六年（七一八年）に玄宗帝に進呈した『五臣集注文選』の劉良注では、「三荊」の典拠は、「田真説話」に変更され、兄弟和睦の要を説くように改作を行った。更に皇子たちのための教科書とされる『初学記』の「田真説話」には、玄宗帝が兄弟の絆を重んじる情を誉め称えるために、「花」という要素が加えられたのである。[43]

五、後世における「田真説話」の受容

唐末五代・前蜀の著名な詩画僧貫休（八三二年～九一二年）は、詩集『禅月集』（巻一）[44]に、「上留田」という詩作を残している。「父不レ父、兄不レ兄。上留田、[45]蝨蟹生。徒陟レ崗、涙崢嶸。[46]我欲レ使三諸凡鳥雀、盡変二爲鶺鴒一。[47]我欲レ使三諸凡草木、盡変二爲田荊一。[48]鄰人歌、鄰人歌。[49]古風清、清風生。[50]」傍線部と注釈の資料を参照すると、貫休も「田真説話」についての改作事情を読み解けた一人と判断できる。少なくとも、楊炯の「従弟去盈墓志銘」及び貫休の「上留田」という詩作を見る限り、唐代以降に「三荊」を兄弟の離別を悲しむ意と、「田荊」を兄弟の和睦を説く意に使い分ける傾向が窺える。

「紫荊樹樹花如錦、方信春風無二浅深一。」（『全宋詩』巻三三五八・陳著四「宜晩小酌二首・其一」）[51]。「摩拊紫荊樹、攀縁常棣華。」（『全元詩』十七・曹伯啓「用二賈公儼韻一寿二何仲礼一」）[52]。この二首は「花」、「常棣華」という言葉が見られ、詩意から見ても兄弟和睦を説く詩作なので、『初学記』の「田真説話」から影響を受けたと考えられる。「風吹紫荊樹、色与二春庭一暮。花落辞二故枝一、風回返無レ処。」（『全唐詩』巻二一七・杜甫「得二舎弟消息一」）。「沙晩鶺鴒寒、風吹紫荊樹。」（『全宋詩』巻三六〇〇・文天祥六「弟第一五三」）。「眼前有レ此紫荊樹、何時重過西州路。」（『全元詩』二九・馬祖常「何仲博家棣韡堂」）。杜甫、文天祥、馬祖常の詩作に「花」、「鶺鴒」や「棣韡」という言葉が見られ、『初学記』の「田真説話」を意識していると判断できるが、詩意から見れば、兄弟の生き別れを悲しむ詩作である。「君家元有紫荊樹、一枝両枝枯或妍。」（『全宋詩』巻三七〇九・陸文圭二「送二仲華葛兄一」）。「悶対亭前紫荊樹、同根那得却相離。」（『全明詩』巻五六・劉基五「感懐二首・其一」）[53]。「庭前紫荊樹、何日再芬芳。」（『全唐詩』巻二六二・竇蒙「題二弟暨述書賦後一」）。この三首は兄弟との離別、或いは死別が詠まれる詩作である。「更笑田家紫荊樹、毎随二人意一作二枯栄一。」（『全宋詩』巻二四三八・陳造十七「題二椿桂堂四首一・其三」）。「而況交柯紫荊樹、東枝憔悴西枝栄。」（『全宋詩』巻三三三〇・高斯得二「読二梅福伝一有レ感」）。「不レ独一斗粟、謡レ之漢

西都。不レ独紫荊樹、乃為二田真一枯。」（『全元詩』二七・丁復「網二魚苗一図為二戈伯敬一題」）。この三首はともに李白の「上留田行」を踏まえた詩作であり、唐代の「田真説話」についての改作事情をある程度に理解していたのではないかと考えられる。

平安時代中期の軍記物語である『将門記』には、こう記す。「或乍レ生迷二親子一而求レ山問レ川。或乍レ惜離二夫婦一而内訪外尋。非レ鳥暗成二四鳥之別一。非レ山徒懐二三荊之悲一。」（「平貞盛等の論功行賞」）。その中に「三荊」は「四鳥」と対の概念として使われているので、陸機の「豫章行」を踏まえたことは明白である。また、夫婦の生き別れに喩えられているので、兄弟の和睦を説く「五臣注」や『初学記』などの注釈書より、離別を悲しむと解釈する『楽府古題要解』[55]（六七〇年～七四九年の間に成立）関係の注釈書を参考した可能性が高い。

江戸における幕末維新期を代表する漢詩人である大沼枕山（文化十五年〈一八一八〉～明治二四年〈一八九一〉）にもこう記す。「紫荊依レ旧著レ花繁、兄弟斯中至楽存。一樹多情分不レ得、寧知富貴煮二同根一。」（『枕山詩鈔』[56]「三編巻之下・田真兄弟図」）。彼の詩作において「田真説話」が兄弟和睦を説く話と認識され、『初学記』からの影響が強く見られる。

六、おわりに

本稿は南朝・梁の『続斉諧記』の「田真説話」と唐代の類書『芸文類聚』に収録される「荊樹連陰説話」を同じ唐代の類書である『初学記』に見られるテキストと内容の比較をし、『初学記』の「田真説話」の改作事情を明らかにした。まず『芸文類聚』と『初学記』の「荊樹連陰説話」の本文を比較し、『初学記』は類書として辞書の性格を持ちながら、典拠を忠実に記録するのではなく、読書の皇子たちを想定しながら編集された特徴を指摘した。次に『続斉諧記』と『初学記』の「田真説話」の本文を比較し、『初学記』が「田真説話」に「花」や「兄弟孔懐」という『詩経』の「小雅・常棣」から由来する言葉を加えることを通して、兄弟和睦という要素を取り入れたことを論証した。また、その加えられた「花」についての更なる考察を通して、『初学記』の「田真説話」は玄宗帝の友悌愛を称えるために、臣下によって改作された可能性を提示した。

結論として、西晋・陸機の「豫章行」の「三荊」の典拠は、周の太伯兄弟がお互いに国を譲る話である。唐の政治事情により、李善は高宗帝李治に進呈した「文選注」において、玄武門の変を憚って、「三荊」の典拠を「古上留田行」と言い出し、民間の兄が弟を虐める話に変えた。後に兄に皇位を譲られた玄宗帝の治世に入り、玄宗帝の臣下である劉良たちは進上した「五臣注」の「三荊」の典拠を「田真説話」に変更し、兄弟和睦を説くように改作を行った。更に皇子たちのための教科書とされる『初学記』の「田真説話」には、玄宗帝が兄弟の絆を重んじる情を称えるために、「花」という要素が加えられたのである。

後の『注好選』や『今昔物語集』、嵯峨本『二十四孝』の「田真説話」をはじめ、殆どの写本及び刊本の「田真説話」に「花」という要素が見られる。『楽府古題要解』関係の注釈書から影響を受けたと考えられる『将門記』には、離別を悲しむ

典拠として「三荊」が使われたが、幕末維新期を代表する漢詩人である大沼枕山の詩作「田真兄弟図」から見ると、兄弟和睦を説く『初学記』の「田真説話」は後世に与える影響が大きくなったと判断できる。このように『初学記』は『芸文類聚』と双璧をなす唐代の類書であり、影響力のある書物であったのである。

今後は『初学記』と、中国ですでに逸書となり、日本に残される零本二巻（写本）が国宝に指定されている『琱玉集』との相関関係、「田真説話」の草子物の変遷について、さらに研究を深めていきたい。

注

（1）大島建彦氏に「この一編は直接に孝行に関するものとはいえない。」（『御伽草子集』「二十四孝」三三三頁　頭注一一　日本古典文学全集三六　小学館　昭和四九年）、市古貞次氏に「中には田真・田廣・田慶の遺産分配に絡まる話のやうに親孝行談といひ難いものもあるが」（『中世小説の研究』五章二　三二〇頁　東京大学出版会　一九八一年）、黒田彰氏に「荊樹連陰の故事が古来、孝子伝或いは、二十四孝の一とされていることについては（略）聊か理解しにくい面がある。」（『孝子伝の研究』三九三頁　思文閣出版　二〇〇一年）、金文京氏に「田真三兄弟の話は、「二十四孝」に入ってはいるものの、実は親孝行ではなく兄弟愛にかかわる。」（『孝行録』の「明達売子」について―「二十四孝」の問題点―」『汲古』一五　平成元年六月）などの意見が見られる。

（2）柳瀬喜代志「「三荊」故事源流考」『学術研究』国語・国文学編第三一号　早稲田大学教育学部　一九八二年、黒田彰『孝子伝の研究』思文閣出版　二〇〇一年、徳田進『孝子説話集の研究―二十四孝を中心に―』井上書房　一九六三年を参照。

（3）原卓志「色葉字類抄における類書の受容」広島大学文学部紀要四四　一九八四年。

（4）唐・歐陽詢撰『芸文類聚』汪紹楹校　上海古籍出版社　一九九九年。尚、読解の便宜を図って、一部の資料に字体の変更・傍線・句読訓点を施した箇所がある。

（5）唐・徐堅等撰『初学記』sl s.n. 一九六一年。

（6）高木正一訳註『鍾嶸詩品』（東海大学出版会　一九七八年）に「其源出二於陳思一」（巻上〈上品〉・〈晉〉陸機）を参照。

（7）南朝・宋・劉義慶『世説新語』（目加田誠　新釈漢文大系第七六巻　明治書院　一九七五年）に「文帝嘗令二東阿王七歩中作一レ詩、不レ成者行二大法。応レ声便為レ詩曰、煮レ豆持作レ羹、漉レ豉以為レ汁。其在二釜下一燃、豆在二釜中一泣。本自二同根一生、相煎何太急。帝深有二慙色一。」（文学第四・六六）。

（8）本詩は早くに『世説新語』に見え、曹植自身の作ではないという謂れがあるが、広く流布している。（川合康三『曹操・曹丕・曹植詩文選』岩波書店　二〇二二年　四〇四頁）。

（9）唐・劉肅撰『大唐新語』（唐宋史料筆記叢刊　中華書局　一九八四年）「玄宗謂二張説一曰、兒子等欲レ学レ綴レ文、須検事及看二文体一、御覧之輩、部帙既大、尋討稍難、卿與二諸学士一撰集二要事並要文一、以類相従、務レ取二省便一、令二兒子等易レ見一成就一也、説與二徐堅韋述等一編二此進上一、詔以二初学記一爲レ名」（巻之九・著述第十九）。

（10）柳瀬喜代志「琱玉集について」（『学術研究』国語・国文学編第二五号　早稲田大学教育学部　一九七六年。

（11）梁・呉均撰『続斉諧記』増訂漢魏叢書載籍第七一冊　清・王謨輯　乾隆五七年序刊。

（12）唐・李善注『文選』（中華書局　一九七七年）の「三荊歓レ同レ株、四鳥悲レ異レ林」（巻二八・楽府下・陸機楽府十七首・豫章行）を参照。

（13）諸橋轍次『大漢和辞典』（大修館書店　二〇〇七年）に「華」はな。草木の花の總稱。又、特に木に華といひ、草に榮といふ。もとに蕚に作る。〔爾雅、釋草〕華、蕚也、華蕚、榮也、木謂二之華一、

草謂二之榮一。〔説文通訓定聲〕（略）開花謂二之華一、云云、華雖レ从レ艸、亦草木之通名矣。」、「花　はな。蕚・華に同じ。〔正字通〕花、本作レ蕚、俗作レ華、省作レ花。草木のはなの總稱。」を参照。

(14)『五臣集注文選』景印宋本「卷十四・楽府・豫章行」（梁・蕭統編　唐・呂延濟、劉良、張銑、呂向、李周翰注　台北国立中央図書館　一九八一年）に「三荊歓レ同レ株　良曰、三荊、三枝共本也。昔有二田廣田真田慶兄弟三人一、将別、無二以分一。明日欲レ分二庭有荊樹一。荊樹経レ宿萎黄。乃相謂曰、荊樹尚然、況我兄弟乎。遂不レ分。荊復悦茂。故云歓レ同レ株。」を参照。

(15)『磐溪廿四孝賛』梧溪叢書写本一冊　仙台市民図書館所蔵　国文研函号六三　一六－一二。

(16) 柳瀬喜代志　矢作武『琱玉集注釋』汲古書院　一九八五年。

(17) 宋・李昉等奉勅纂『太平御覧』台湾商務印書館　一九六八年。

(18) 元・胡炳文『純正蒙求』江戸出雲寺萬次郎刊　一八〇四年。

(19) 元・郭居敬『新刊全相二十四孝詩選』禿氏祐祥（複製）全国書房　一九四六年。

(20) 馬淵和夫　小泉弘　今野達校注『三宝絵　注好選』新日本古典文学大系三一　岩波書店　一九九七年。

(21) 小峯和明校注『今昔物語集』二　新日本古典文学大系三四　岩波書店　一九九九年。

(22)『加言二十四孝』巻子本一軸　手柄岡持自筆　国文研四孝文庫四－八。

(23) 国文研の四孝文庫、国立国会図書館、早稲田大学古典籍総合データベースを参照。

(24)『初学記』巻第十七・友悌第五「棣華　荊葉」の条に「棣華　毛詩曰、棠棣之華、鄂不二韡韡一。凡今之人、莫レ如二兄弟一。死喪之威、兄弟孔懐。」を参照。

(25)　石川忠久『詩経』新釈漢文大系第一一一巻　明治書院　一九九八年。

(26)『文心雕龍』（南朝・劉勰著　戸田浩暁　新釈漢文大系第六五巻　明治書院　一九七八年）「陸機才欲レ窺レ深、辞務レ索レ広。故思能入レ巧、而不レ制レ繁。」（巻十・才略第四七上）。

(27) 唐・楊烱撰『楊盈川集』上海涵芬楼　江南図書館蔵明童氏刊本　民国年間（一九一二年～一九四八年）。

(28) 清・彭定求編『全唐詩』中華書局　一九六〇年。尚、訓読は大野實之助の『李太白詩歌全解』（早稲田大学出版部　一九八〇年）を参照した。

(29)　李善注『文選』の「三荊歓レ同レ株　古上留田行曰。出是上獨西門。三荊同一根生。一荊断絶不レ長。兄弟有二両三人一。小弟塊摧獨貧。」（巻一八・楽府下・陸機楽府十七首・豫章行）を参照。

(30) 明・馮惟訥輯『詩紀』（聚錦堂蔵版　萬歴）の「古今注曰、上留田、地名也。其地人有下父母死不レ字二其孤弟一者上、隣人爲二其弟一作二悲歌一、以風二其兄一。楽府廣題曰、蓋漢世人也。」（「漢第七、詩紀十七、楽府古辞、雑曲歌辞・上留田行」）を参照。

(31)『詩経』「小雅・常棣」の「脊令在レ原、兄弟急レ難」を参照。

(32)　宇野精一『孔子家語』（明治書院　一九九六年）の「四鳥説話」を参照。「孔子在レ衛。昧旦晨興。顔回侍レ側。聞二哭者之声甚哀一。子曰、回、汝知二此何所一レ哭乎。対曰、回以此哭声非下但為二死者一而已上。又有二生離別一者也。子曰、何以知レ之。対曰、回聞、桓山之鳥生二四子一焉。羽翼既成、将分レ于二四海一。其母悲鳴而送レ之。哀声有レ似レ於レ此。謂二其往而不レ返也。回窃以二音類一而知レ之。孔子使二人問二哭者一。果曰、夫死家貧。売レ子以葬、與レ之長決。子曰、回也、善レ於レ識レ音矣。」（「巻五・顔回十八」）。

(33)『続斉諧記』の「田真説話」を参照。

(34)『分類補註李太白詩（一）』（〈巻三・楽府・上留田行・元・蕭士贇注〉芳村弘道解題　尊経閣文庫蔵　汲古書院　二〇〇五年）、『李杜詩通』（明・胡震亨輯　東洋文庫蔵　永暦四年〈一六五〇年〉刊本）、『重訂唐詩別裁集』（清・沈德潜選　小西山房　清乾隆二八年〈一七六三年〉序）、『御選唐宋詩醇』（清高宗勅選　公益會　清光緒三年〈一八七七年〉）、『李太白詩歌全解』（大野實之助　早稲田大学出版部　一九八〇年）などを参照。

(35)　鎌田正『春秋左氏伝』三　新釈漢文大系第三三巻　明治書院　一

九七七年。

(36) 水沢利忠『史記』八列伝一　新釈漢文大系第八八巻　明治書院一九九〇年。

(37) 吉田賢抗『史記』五世家上　新釈漢文大系第八五巻　明治書院一九七七年。

(38) 青木五郎『史記』十二列伝五　新釈漢文大系第九二巻　明治書院二〇〇七年。

(39) 『史記』「巻六一・伯夷列伝第一」の「孔子序列二古之仁聖賢人、如二呉太伯・伯夷之倫一詳矣。」、「巻三一・呉太伯世家第一」に「太史公曰、孔子言、太伯可レ謂二至徳一矣。三以二天下一讓、民無二得而称一レ焉。余読二春秋古文一、乃知下中国之虞與二荊蛮句呉一兄弟上也。延陵季子之仁、心慕二義無レ窮、見レ微而知二清濁一。嗚呼、又何其閎覽博物君子也。」を参照。

(40) 「唐睿宗五子列レ第一東都一、号二五王子宅一。時玄宗爲二太子一、製二長枕大被一、與二諸王一共レ之。後於宮西置二花萼相輝之楼一、取下棣萼宴二兄弟一之義上。時一登レ之、必召與同レ榻、賦レ詩宴嬉。世謂天子友悌、古無二有者一。帝於敦睦天性然也。時有二鶺鴒千数一集二麟德殿庭樹一、翔棲浹レ日」（『純正蒙求』「玄宗棣華」）。

(41) 『唐書』（北宋・宋祁、欧陽修　範鎮、呂夏卿など撰　長澤規矩也解題　汲古書院　一九七〇年）「讓皇帝憲、始王二永平一。文明元年、武后以二睿宗一爲二皇帝一、故憲立爲二皇太子一。睿宗降爲二皇嗣一、更册爲二皇孫一、與二諸王一皆出レ閤、開レ府置二官属一。（略）睿宗将建二東宮一、以下憲嫡長、又嘗爲二太子一、而楚王有中大功上、故久不レ定。憲辞曰、儲副、天下公器、時平則先レ嫡、国難則先レ功、重二社稷一也。使付授非レ宜、海内失望、臣以レ死請。因涕泣固讓。時大臣亦言、楚王有下定二社稷一功上、且聖庶抗レ嫡、不二宜更一レ議。帝嘉二憲讓一、遂許レ之、立二楚王一爲二皇太子一（略）初、帝五子列レ第一東都積善坊一、号二五王子宅一。（略）玄宗爲二太子一、嘗製二大衾長枕一、将與二諸王一共レ之。睿宗知、喜甚（略）天子於宮西、南置レ楼、其西署曰花萼相輝之楼（略）帝時時登之、聞二諸王作一レ楽、必亟召レ升楼、與同榻坐、或就幸レ第、賦レ詩燕嬉、賜二金帛一侑歓（略）世謂天子友悌、古無二有者一。帝於敦睦蓋天性然、雖二讒邪乱一其間一、而卒無二以揺一。時有二鶺鴒千数一集二麟德殿庭樹一、翔棲浹レ日。左清道率一府長史魏光乗一作レ頌、以爲二天子友悌之祥一。帝喜、亦爲作レ頌。憲尤謹畏、未嘗干レ政而與レ人交、帝亦信重（略）憲嘗請歳盡録二賜目一付二史官一、必数百紙（略）薨、年六十三。（略）帝以レ憲実推二天下一、有二高世之行一、非二大号一不レ称、乃追諡二讓皇帝一」（「巻八一・列伝第六・三宗諸子・讓皇帝憲」）。

(42) 『旧唐書』（後晋・劉昫等撰　中華書局　一九七五年）「（睿宗）乃下レ制曰、左衛大将軍、宋王成器、朕之元子、当践二副君一、以二隆基一有二社稷大功一、人神僉属、由是朕前懇讓、言在必行、天下至公、誠不レ可レ奪、爰符二立レ季之典一、庶協二従一人之願一（略）時太平公主陰有二異図一。姚元之、宋璟等請出二成器及申王成義一爲二刺史一、以絶二謀者之心一（略）玄宗嘗製二一大被長枕一、将與成器等共申一友悌之好一。睿宗知而大悦、累加賞嘆（略）玄宗於興慶宮西、南置レ楼、西面題曰花萼相輝之楼（略）以爲二天子友悌、近古無一レ比（略）玄宗既篤二於昆季一、雖下有二讒言一交搆中其間上、而友愛如レ初。憲尤恭謹畏慎、未下曾干議一時政一及與レ人交結上、玄宗尤加信重レ之（略）十一月薨、時年六十三。上聞レ之、号叫失レ声、左右皆掩レ涕。翌日、下レ制曰、能以レ位讓、爲二呉太伯一（略）敬追諡曰讓皇帝（略）十数年間、棣華凋落。謂レ之手足、唯有二大哥一（略）業嘗疾病、上親爲祈祷、及愈（略）玄宗賦レ詩曰、昔見漳浜臥、言将二人事違一。今逢誕慶日、猶謂学レ仙帰。棠棣花重満、鶺原鳥再飛。其恩意如レ此」（「巻九五・列伝第四五・睿宗諸子」）。

(43) 後に清時代の類書『淵鑑類函』（清・張英［ほか編］　清吟堂　清康熙四九年〈一七一〇年〉序）にある「田真説話」（巻二四九・人部八・兄弟・分荊／巻四一六・木部五・荊三・議分即枯）までも、『初学記』や「五臣注」にあるテキストの傾向を踏襲している。

(44) 陸永峰『禅月集校注』四川出版集団巴蜀書社　二〇〇六年。

(45) 李善注の「古上留田行」を参照。

(46) 李白の「上留田行」を参照。

(47) 『詩経』「小雅・常棣」の鶺鴒。

(48) 「田真説話」を参照。

(49) 「上留田行」の古今注を参照。
(50) 李白の「上留田行」を参照。
(51) 馬辛民編『全宋詩』北京大学出版社　一九九八年。
(52) 楊鑌編『全元詩』中華書局　二〇一三年。
(53) 『全明詩』上海古籍出版社　一九九三年。
(54) 柳瀬喜代志　矢代和夫　松林靖明校注・訳『将門記』新編日本古典文学全集四一　小学館　二〇〇二年
(55) 『楽府古題要解』（唐・呉兢撰　国立国会図書館蔵　須原屋新兵衛刊　享保十七年）の「右陸機泛二舟清川渚一、謝霊運出レ宿告二密親一、皆傷二離別一、言二寿短景馳、容華不レ久一」（「豫章行」）を参照。
(56) 大沼厚『枕山詩鈔』岐阜大学附属図書館蔵　函号九一九－二八五一九

（ちょう・できひ）